

『土地分類図 27 (大阪府)』平成 3 年 10 月 30 日復刻
 監修：国土庁土地局国土調査課
 発行：財団法人日本地図センター
 印刷：株式会社 日誠

地形分類図

凡例 Legend

山地・山麓地 Mountains and piedmont

- 大起伏山地**
Larger relief mountains
起伏量が600mを越える山地で、府下では図示するに足る場所は殆んどないが、金剛山地や和泉山地に僅かにみられる。
- 中起伏山地**
Middle relief mountains
起伏量400~600mの山地で、和泉、金剛山地の約半、生駒山地の半分がこれにあたり、帯状で分布する。北摂山地にもこの山地がみられるが、点在して分布し、山地の約半を占める。
- 小起伏山地**
Smaller relief mountains
起伏量200~400mの山地で、北摂山地の大部分、生駒山地の北部、和泉山地の北側や西部、金剛山地の西部に広く分布する。府下では、この山地が最も広い面積を占めている。
- 山麓地 I**
Piedmont I
起伏量100~200mの山地縁辺部にある急斜面で、北摂山地の断層崖に沿ったものと、生駒金剛山地や和泉山地のように、山地の縁辺部的性格のものがある。
- 山麓地 II**
Piedmont II
起伏量が100m以下の山地縁辺部の緩傾斜面で、これに当るものは少なく、規模は小さく点在して分布する。

丘陵地・台地・段丘地 Hillylands, Uplands and Terraces

- 大起伏丘陵地**
Larger relief hill lands
起伏量100~200mの丘陵地で、北摂山地内陸盆地にみられる花崗岩類を主とするものと高槻丘陵や泉北丘陵にみられるもののように山地や山麓地に接し、大阪府下層よりなるものがある。
- 小起伏丘陵地**
Smaller relief hill lands
起伏量100m以下の丘陵地で、府下の大部分の丘陵がこれにあたる。千里丘陵、富田林丘陵、泉北、泉南丘陵などでは広大な面積を占めている。
- 段丘(高位)**
Upper terrace
府下の段丘については、高・中・低位の3つに分類されている。高位は僅次山台地や上段部に点在してみられる。中位段丘については上可台地が、低位段丘については兵庫県の伊丹段丘が模式となっている。しかし、各段丘についての識別には、やや問題があり、今回は中・低位の段丘を一括して取扱ひ、あえて分けなかった。大和川以南の泉北・泉南台地では広く段丘が展開している。
- 段丘(中・低位)**
Middle and lower terrace

低地 Lowlands

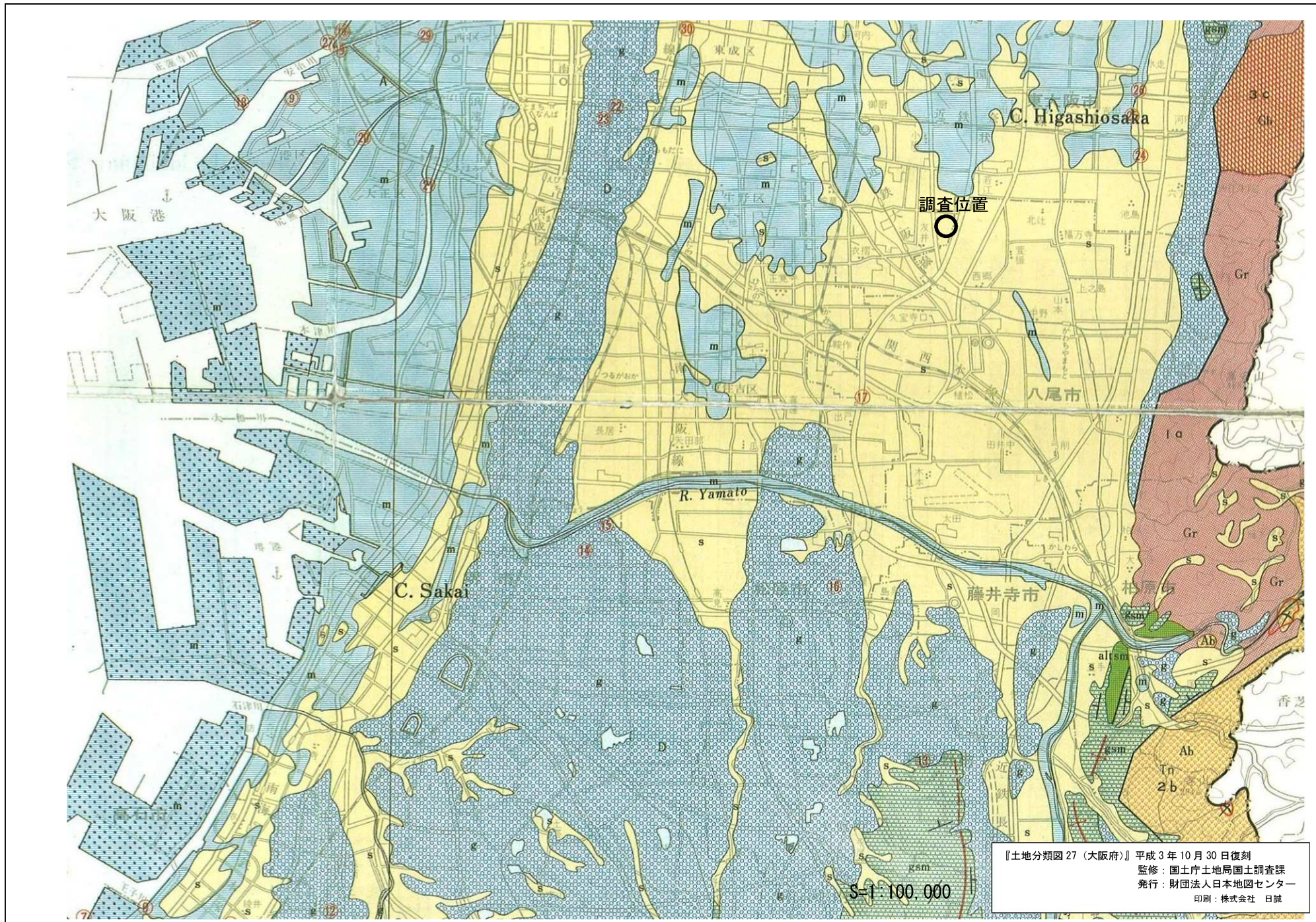
- 扇状地性低地**
Fan
扇状地性低地として典型的なものは旧大和川扇状地で、柏原を中心として同心円的な地形がみられる。他は河川の氾濫原といふべきものが大部分である。
- 三角洲性低地**
Delta
大阪湾に面する西大阪平野に最も広くみられる。東大阪平野もこれに属するが、旧大和川の河川の流入により自然堤防が発達し、不規則な分布をする。
- 自然堤防・砂洲**
Natural levee and sand dune
東大阪平野では、旧大和川およびその支川がみられ、自然堤防が河川に沿って発達している。また、その一部は天井川を形成している。一方、上可台地の西部では砂洲が帯状に発達し、牧田付近でも淀川の一部としてかなり広い面積を占めている。

副分類 Sub classification

- 埋立地**
Artificially filled area
埋立地は、淀川川口付近、木津川付近に見られるが、これらは江戸時代から徐々に埋立てられ、明治時代までつづいている。一方堺・泉北では、戦後、府の埋立事業によって実施されたので、その面積は大きく、堺、泉北臨海工業地帯を形成している。また、津和野や泉佐野のような南部でも埋立地が分布している。
M18-22陸軍参謀本部測量水面(複製1/2万による)を埋立たもの
- 府県界**
Boundary of prefecture
- 主要分水界**
Main divide
- 山地の緩斜面**
Gentle slopes on mountains
- 構造性急斜面**
Tectonic steep slope
- T.P.O m 以下**
Contes line of sea level
(大阪地盤沈下総合対策協議会S46による)
- 地すべり防止区域**
Landslide (建設省)
- 地すべり防止区域**
Landslide (農林省)
- 人工改変地**
Artificially deformed area

地形地域区分

A. 山地	A-I. 北摂山地	A-I a. 北摂山地 A-I b. 能勢山間盆地群	
	A-II. 生駒、金剛山地	A-II a. 生駒山地 A-II b. 生駒西麓地 A-II c. 生駒盆地 A-II d. 大和川河谷 A-II e. 二上山地 A-II f. 葛城山地 A-II g. 金剛山地	
	A-III. 和泉山地		
B. 丘陵地	B-I. 北大阪丘陵地	B-I a. 千里丘陵 B-I b. 高槻丘陵 B-I c. 箕面丘陵	
	B-II. 枚方丘陵地	B-II a. 枚方丘陵 B-II b. 長尾丘陵	
	B-III. 南大阪丘陵地	B-III a. 富田林丘陵 B-III b. 河内長野丘陵 B-III c. 河南丘陵 B-III d. 嵯山山地 B-III e. 石川低地 B-III f. 美原台地	
		B-IV. 泉北丘陵地	
		B-V. 泉南丘陵地	B-V a. 泉南丘陵 B-V b. 神於山山地
C. 台地	C-I. 上町台地		
	C-II. 信太山台地		
	C-III. 泉南台地		
D. 平野	D-I. 大阪平野	D-I a. 西大阪平野 D-I b. 東大阪平野 D-I c. 淀川低地 D-I d. 猪名川低地 D-I e. 堺・泉北臨海平野 D-I f. 旧大和川扇状地	



表層地質図

凡例 Legend

未固結堆積物 Unconsolidated sediments		礫 Gravel	段丘礫層からなる。大阪府南部、北摂山麓、生駒丘陵に分布する。分布高度により、高位段丘礫層と中・低位段丘礫層に分けられる。高位段丘礫層は厚さ5~10mで赤褐色の風化礫から成る。分布は信太山、千里丘陵北部、枚方市東部などに限られている。中位と低位の段丘礫層の区分には問題が残されているが、いずれも広い台地を作る。厚さ10m前後の中・大礫層で、中部に砂層やシルト層を挟む場合もある。この礫層は平野の地下にも分布しており、大阪市街地では実流層と呼ばれる支持層を作るものと見られる。(更新統後期)	
		砂 Sand	沖積砂層からなる。主に平野に分布しており、沖積粘土層を覆う。自然堤防、扇状地など堆積地を作る。また、丘陵地や山間の谷底平野にも分布する。地盤としては下位の粘土層の分布に注意を要する。なお、垂直的分類図では支持層の深度15m以上の部分は泥層を主とする地域に含めた。(沖積統)	
		泥 Mud	主に沖積粘土層からなる。西大阪、淀川沿岸及び東大阪の平野部に広く分布する。大阪市街地では梅田層と呼ばれる海成粘土層で、厚さ20~30mに達するN値0~3回の軟弱層である。東大阪にも厚さ30m以上に達する軟弱層の分布が知られている。地盤沈下、地震災害等、問題の多い地盤を作る。(沖積統)	
固結堆積岩 Consolidated sediments		泥、砂、礫互層 Mud, sand and gravel alternation	丘陵地に分布する。大阪府群と呼ばれる地層で、泥、砂、礫の詳細な区分が行われているが、本図では細尺の層位で、一括した。砂礫層は良好な地盤を作る。泥層もN値15~20回以上で、よく締っている。しかし、構造線に沿って急傾斜したり、破砕を受けており、粘土層の分布地では地すべりに注意が必要である。海成粘土層も含まれており、重化すると塊状性粘土となる。なお、垂直的分類図では海成粘土を扱ひ、比較的粘土層の連続する丘陵地を区分した。(鮮新統-更新統前期)	
		礫岩 Conglomerate	和泉層群の山基礫岩層は厚さ50m内外で直径数cm~10cmの円礫を主とする。礫層は泉酸性火砕岩類が多く、花崗岩、古生層チャートなども交える。丹波層群は礫岩の発達が悪く、小・細礫が砂岩に含まれる場合もあるが、砂岩に一括した。(白亜系)	
		砂岩 Sandstone	丹波層群の砂岩は暗灰色又は暗青灰色の中・粗粒砂岩で、塊状である。新鮮なものでは強酸性岩質で、砕石に用いられる。和泉層群の砂岩は石英と長石として有名で、青緑色の中・粗粒である。緑泥石を含む、中・細礫を交えたり、礫岩と互層する場合が多い。(中・古生界)	
		泥岩 Mudstone	丹波層群のものは黒色・暗灰色の頁岩、粘板岩からなる。断層に沿って片状に破砕されている。和泉層群のものは厚さ400~500mの黒色塊状で、汗・谷頁岩層と呼ばれる。(中・古生界)	
		砂岩、泥岩互層 Alternation of sandstone and mudstone	丹波層群では数10cm~数mの、和泉層群では数cm~数10cmの暗灰色砂岩と黒色泥岩の互層である。和泉層群では互層が発達しており、皇子畑砂岩頁岩層は厚さ1500mに達する。千里丘陵鳥飼山北部に小分布する神戸層群は、粗粒花崗質砂岩と青緑色泥岩からなる。また南部では二上層群にみられ、玉手山丘陵の一部や南部の丘陵の周辺部に点在する。(新第三系中新統および中・古生界)	
		珪岩質岩石 Siliceous rock	丹波層群に発達する。灰色・暗灰色が多いが、赤色又は暗緑色のものもある。石英を含み、珪質頁岩と厚さ2~3cmの互層を構成する。最近の研究によると、珪質殻を持った生物の集合であることが明らかとなった。(中・古生界)	
		輝緑凝灰岩 Schalstein	丹波層群に含まれる。暗緑色又は赤紫色で塩基性の海底火山活動により生じた火山岩類(凝灰岩、溶岩、集塊岩)である。石灰岩のレンズ状の小岩体をしばしば伴うが、本図では縮尺の関係で省略した。(中・古生界)	
	火山性岩石 Volcanic rocks		流紋岩質岩石 Rhyolitic rocks	中生代白亜系の酸性火砕岩類からなる。流紋岩、石英粗面岩、石英斑岩、凝灰岩などを含む。熊野町北部のものは有馬層群、和泉山地のものは泉酸性火砕岩類と呼ばれている。砕石に用いられる。(白亜系)
			安山岩質岩石 Andesitic rocks	主に二上山付近に分布する新第三系中新統の二上層群からなる。安山岩、石英安山岩、噴火岩などの火山岩類の他に、凝灰岩、礫岩、砂岩、泥岩などの堆積岩を含み、複雑な分布をしている。従って本図では一括した。火山岩類は砕石に用いられる。二上山の他に河内長野市、岸和田市南部には安山岩が小分布する。(新第三系中新統)
	深成岩 Plutonic rocks		花崗岩質岩石 Granitic rocks	茨木市北部に分布する茨木複合花崗岩体は石英閃緑岩、細粒斑状アグメロ岩から成る。深層風化を受けてマサ土状で、地すべり地が分布している。大阪府中・南部の山地には嶺家花崗岩類が広く分布している。花崗岩・花崗閃緑岩を主とし、片状構造の発達が見られる。堆積岩類が変成したもので閉成部分もある。変質は風化を受けてマサ土状となり、生駒、金剛山地では採土されている。
		斑れい岩質岩石 Gabbroic rocks	生駒山頂付近に分布する。噴火岩質類の塩基性岩で、ドーム状岩体である。粗粒で、橄輝石、紫蘇輝石、角閃石などを含み、生駒石と呼ばれる。	
		ミロナイト Mylonite	和泉山地は中央構造線に平行しており、河内長野市南東線には和泉層群が構造運動により破砕された暗青灰色角礫質圧砕岩が小分布している。	

付加記号 Additional symbol

	埋立地 Artificially filled area
	砕石 Quarry
	土砂 Sand and soil
	マサ土 Masa (wethering soil)
	走向傾斜 Strike and dip
	背斜軸 Axis of anticline
	向斜軸 Axis of syncline
	断層 Fault
	A—B 断面線 Locality of section line
	山 鉱泉 Mineral spring
	① 1~13 深層ボーリングの位置および番号 Locality and number of bore hole (Deep)
	② 1~40 浅層ボーリングの位置および番号 Locality and number of bore hole (Shallow)

時代 Age	P	古生代 Paleozoic
	M	中生代 Mesozoic
	Tp	古第三紀 Paleogene
	Tn	新第三紀 Neogene
	D	洪積世 Diluvium
A	沖積世 Alluvium	
岩体のかたさ Hardness of rock masses	1	軟 (弾性波伝播速度1.5km/sec未満) Soft (Velocity of elastic wave, less than 1.5km/sec)
	2	中 (弾性波伝播速度1.5~3.0km/sec) Medium (Velocity of elastic wave, 1.5~3.0km/sec)
	3	硬 (弾性波伝播速度3.0km/sec以上) Hard (Velocity of elastic wave, more than 3.0km/sec)
岩片のかたさ Hardness of rock specimens	a	軟 (耐圧強度100kg/cm²未満) Soft (Compressive strength, less than 100 kg/cm²)
	b	中 (耐圧強度100~400kg/cm²) Medium (Compressive strength, 100~400 kg/cm²)
	c	硬 (耐圧強度400kg/cm²以上) Hard (Compressive strength, more than 400 kg/cm²)

地点	Ba 32	Ba33(1)	Ba 33(2)	Ca 9
年月		59-7	59-7	63-3
O. P.	+ 6.8	+ 6.3	+ 6.3	+ 6.0
W. L.	- 0.45	- 0.85	- 5.10	- 0.95

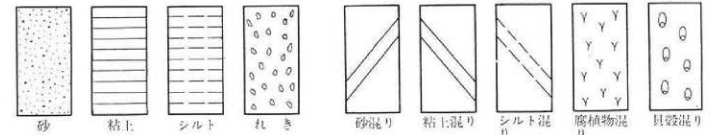
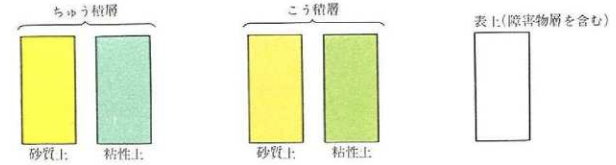
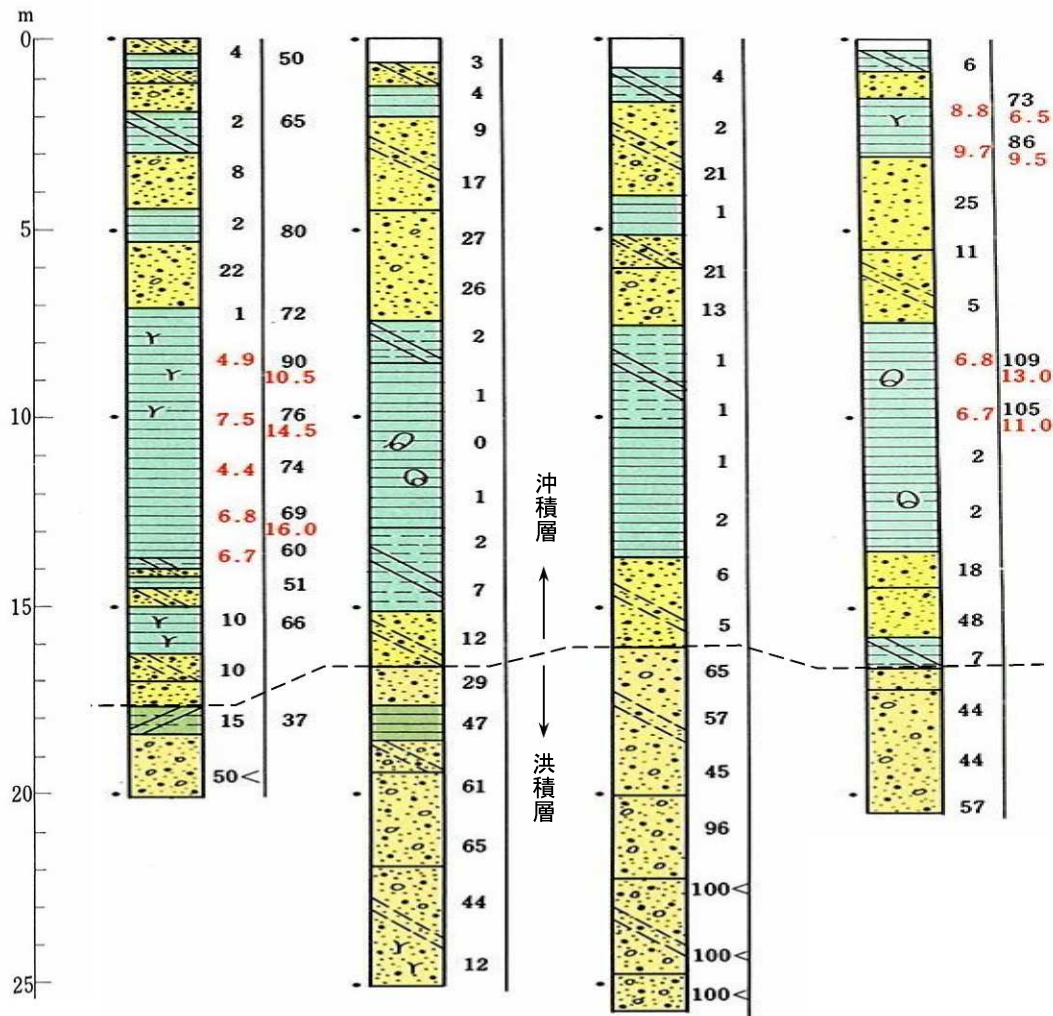
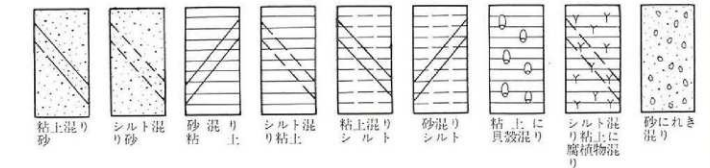


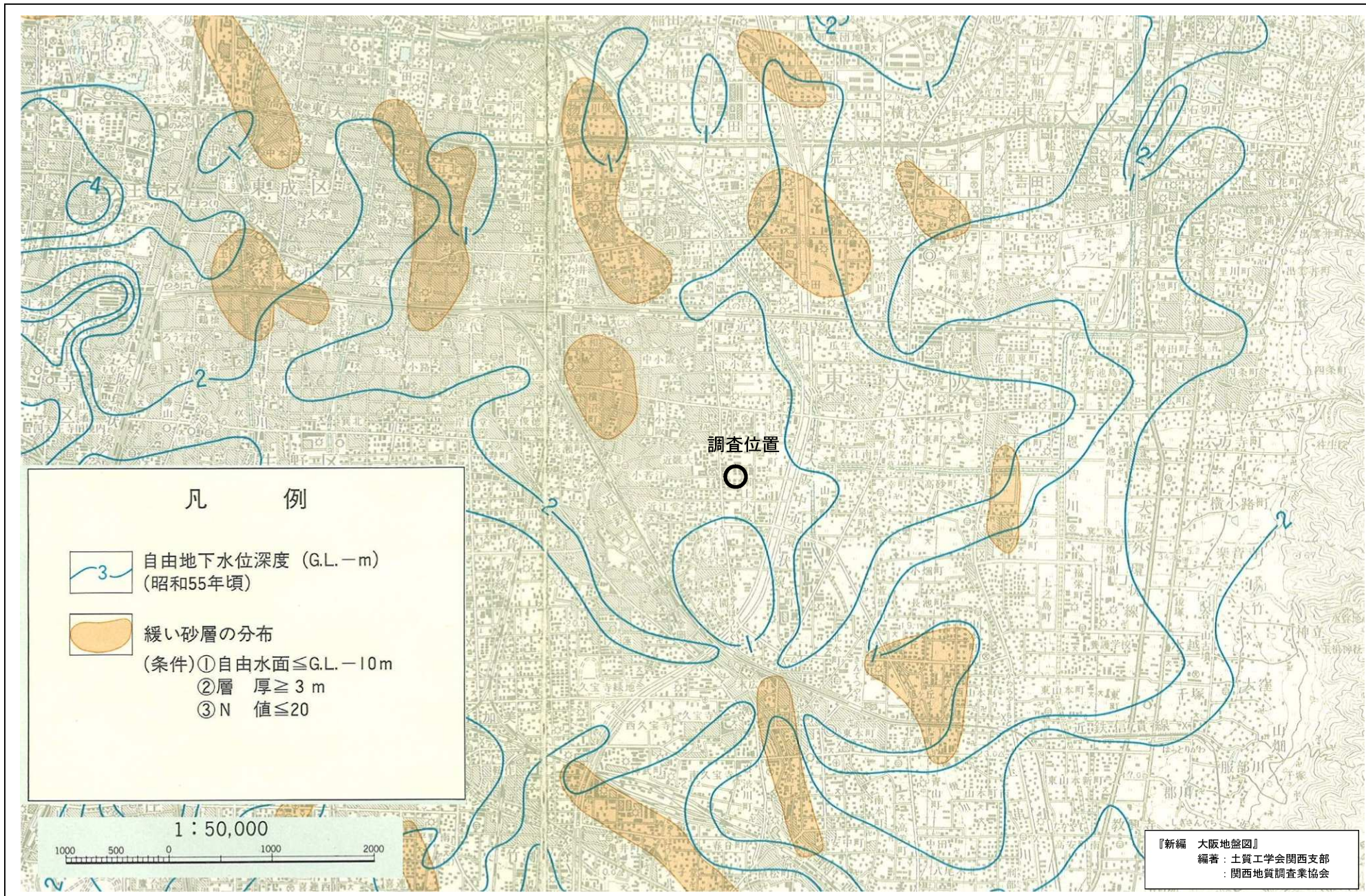
図5 基本記号

図6 副記号



『大阪地盤図』昭和41年7月発行
 編著：土質工学会関西支部
 ；日本建築学会近畿支部
 発行所 株式会社コロナ社

土質柱状図



緩い砂層分布と自由地下水位深度分布図